

和歌山市指定文化財(史跡)

園部円山古墳調査概報



1989

園部円山古墳保存会

はじめに

園部円山古墳は紀ノ川北岸の丘陵上にある古墳である。この古墳のある丘陵の西側には、大谷古墳や楠見遺跡をはじめとして多くの古墳や古墳時代の遺跡があり、紀の川北岸では古墳の実態が比較的良好にわかっている地域である。ただ、それらの調査の多くが土木工事などを契機としておこなわれたために、逆に調査後に取り壊された古墳が多いことも事実である。

園部円山古墳も現在では立派に周知された遺跡であるが、その存在がわかったのは土木工事によって横穴式石室があらわれたことによってであった。このような不時の発見によるにもかかわらず古墳が保存されたのは、ひとえに土地所有者である地蔵寺の関係者の方々の文化財保護への御理解と熱意によるものといわねばならない。

二回にわたっておこなった発掘調査の正式な報告書は近い将来刊行するつもりであるが、今回、石室開口部の屋根掛け工事が完了し、石室を公開することになったのを機会としてこの小冊子を発行し、古墳の概要を紹介する次第である。

なお、本文は大野左千夫と前田敏彦が分担執筆した。それぞれの分担は文尾に記したとおりである。(大野)

調査の契機と経過

和歌山市園部の山の上で古墳を発見したという電話連絡が和歌山市教育委員会社会教育課に入ったのは、1982(昭和57)年12月22日のことであった。当時、私を含めて文化財係員は管外出張で和歌山を離れていたが、12月24日には現地に赴き現状の確認にあたった。

関係者の方々から話をうかがうと、古墳の検出された小山のすぐ下にある地蔵寺の本堂庫裡が老朽化したので、裏山を削って建物を改築する計画がたてられた。そこで、まず裏山の削平工事ははじめたところ、12月18日に工事用重機がひとかかえ以上もある大石にあたった。その石材を取り除いたところ、横穴式石室であ



図1 古墳の位置(1:5000)

ることがわかったので、その時点で工事を中止した、ということであった。

その石材が抜かれた穴からはしごを伝って石室内におりてみると、大型の石材を使ったみごとな横穴式石室であった。玄室内はまったく土砂が積っておらず、床面には細かな割り石が敷かれているのがみられたが、羨道は土砂で埋めつくされており、その土砂は玄門部まで斜めに流れ込んでいた。このような状況から、すでに羨道部に盗掘を受けていることが予測されたが、岩橋千塚古墳群の主要な古墳の横穴式石室に匹敵する規模のものであることは驚きであった。

そこで関係者の方々と協議し、基本的に古墳の保存について強くお願いをするとともに、とりあえず古墳の規模を確認する調査をおこなうこととし、それまでは現状を変更しないようお願いをしたところ、幸いにも了解していただけた。

新たに検出された遺跡であるので、文化財保護法にもとづく国への届出の処置をおこなうとともに、石室の損傷部分へ応急の処置をほどこし、調査に備えた。また、地元では古墳についての伝承や名称がまったくなかったため、現地の通り名が「鴻ノ巣^つ山^{やま}」であることから、旧村名である園部(園部村。1889(明治22)年六十谷村と合併して^{いさお}いさお村となる。1958(昭和33)年和歌山市に合併。)を冠して「^{そのへ}園部^{まるやま}円山古墳」と名付けた。

第1次調査 墳丘測量・墳丘確認調査・横穴式石室羨道部の発掘調査など古墳の規模の確認を目的として実施した。期間は1983(昭和58)年2月7日から3月28日までの延41日間で、このあと4月17日まで石室の実測などの補足調査をおこなった。

第2次調査 つぎにみるように古墳の保存も決り、石室の公開をはかる必要が生れたので、横穴式石室床面の確認を目的として1988(昭和63)年1月18日から3月31日まで実施した。その後6月13日まで断続的に横穴式石室の補足実測などを続けた。7月2日には現地説明会を開催したところ、雨で一週間延期したにもかかわらず、約230人の方々の参加があった。

古墳の保存と整備 第1次調査のあと関係者の方々と数回の協議を重ねたところ、いろいろな意見が出されたが、結論的には幸いにも基本的に古墳の保存についての了解が頂けた。これによって1985(昭和60)年4月には和歌山市指定文化財(史跡)に指定し、その後、古墳への登り口に説明板を設置した。1987(昭和62)年5月には、横穴式石室の上の墳丘が当初の土木工事によって削られたままであったので、その部分の緑化工事を実施した。今回(1989年3月)実施した屋根掛け工事は、天井石が失われている羨道部を覆うようにしたもので、あわせて入口には扉を兼ねた柵を設けた。(大野)

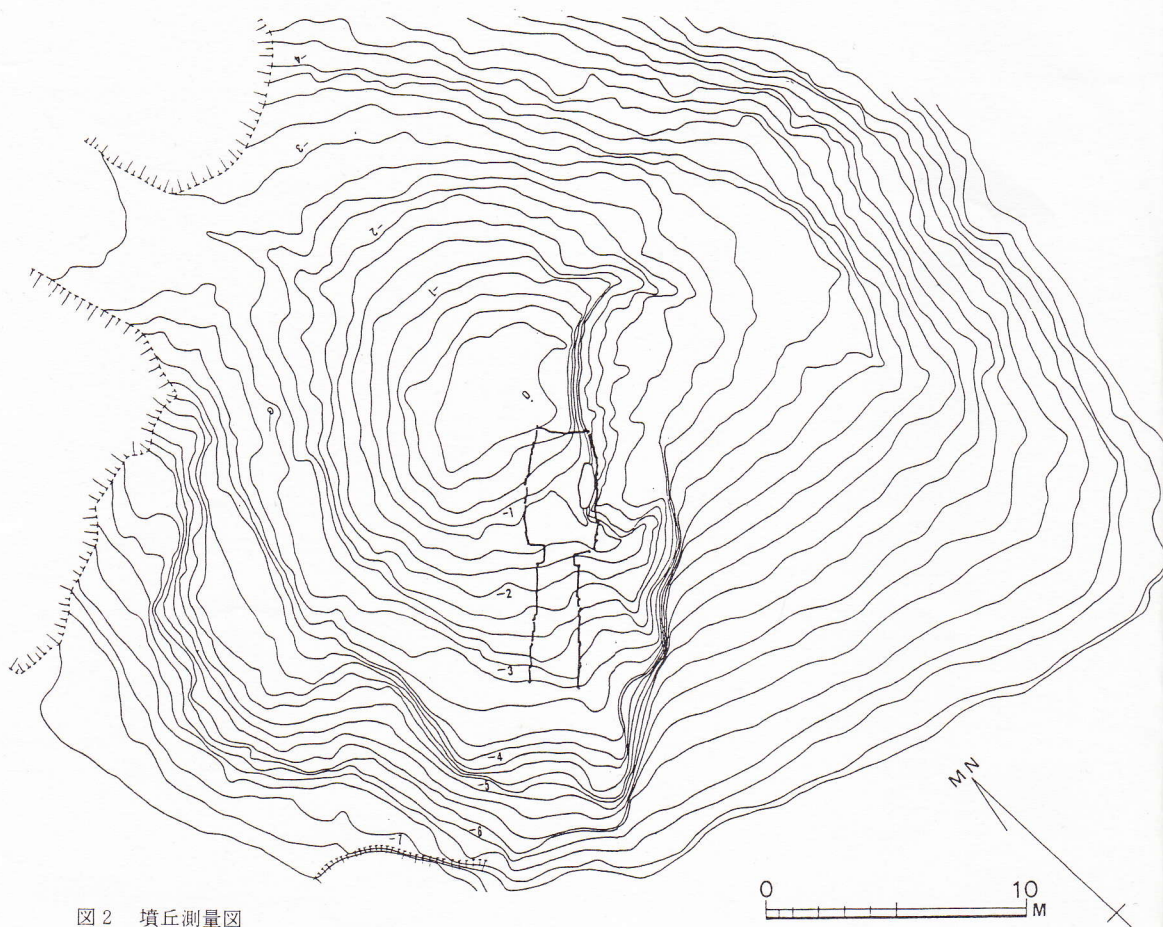


図2 墳丘測量図

墳丘

立地と環境 園部円山古墳は和泉山脈から南へ派生する尾根支脈の先端にある（図1）。付近の細かな地形を見ると、古墳のある小尾根の基部で東西から谷が入り込んでいて小独立山塊状となっている。この小尾根の下は南へゆるやかに傾斜する下位段丘面が続いている。ここからの比高は約30mとあまり高い位置にあるようにはみえないが、墳丘上の標高は約69mあり、紀ノ川北岸の平野からは古墳をよく見ることができる。また、古墳の上からは現在の紀ノ川河口から南岸の岩橋山塊とその東に続く龍門山系をみわたすことができる。古墳のある土地の地番は和歌山市園部1635番地である。

付近の丘陵上、とくに鳴滝川をはさんで西側には多くの古墳が知られている。南西1.8kmには大谷古墳をはじめ10基の古墳からなる晒山古墳群があり、その東側には6基の古墳からなる雨谷古墳群、さらに谷を隔てて東側には鳴滝古墳群がある。また、鳴滝川西岸には砂岩の石材を用いた横穴式石室をもつ奥出古墳がある。このほか、大谷古墳のある丘陵の下には陶質土

器多数を出土した楠見遺跡、鳴滝古墳群のある丘陵北西部には古墳時代中期の建物跡が検出されて注目された鳴滝遺跡がある。

墳丘測量とトレンチ 古墳が確認されたときはすでに墳頂部および墳丘の東半分が削平されていたが、墳丘測量図（図2）をみると墳丘北側と西側の一部が自然な傾斜を示しており、円形の墳丘をうかがうことができる。また、墳丘北側の尾根についてみると、用水路の掘削によって崖状に掘り割られているため、山側への尾根筋はせまい橋状になってしまっている。ただ本来この部分は小さな谷が左右から入り込んでいるところで、また尾根筋をたどってみると登り勾配が続くばかりで、この北側は自然地形と考えられる。

西側には2個所のテラス状の部分がみられるが、これはトレンチ断面の検討によって後世の改変によるものと判断された。このテラス状の上方では等高線がやや直線的に延びて注意をひくが、付近にトレンチを入れてみると二次堆積が厚く、これもテラス状の改変によって生れたものと考えられる。

墳丘上に設けたトレンチの断面でみると、現地表か

ら厚さ50~80cmはしまりのない黄灰色混礫土で、これは二次堆積と考えられる。その下に墳丘盛土と考えられる黄灰色粘質土と黄灰色混礫土からなる固くしまった土層があり、その下が地山（黄灰色砂岩）となっている。

等高線の流れとトレンチ断面の観察をあわせてみると、北側の一部がもっとも本来の墳丘の形を残していると考えられるが、これらの点からみるとこの古墳は円墳で直径は約25m、高さは約5mある。この規模で墳丘の範囲を復原してみると、現状でもっとも高い部分は本来の墳頂ではなく、それよりやや南側が本来の墳頂であったと考えられる。（大野）

横穴式石室

園部円山古墳の横穴式石室は両袖式で全長9.55mあり、玄室・玄室前道・羨道からなる。開口方向は南47度西である（図6）。

玄室 玄室は左側壁最上部の1石が検出時に抜き取られた以外は完存する。右側壁の長さ4.3m、左側壁の長さ4.5m、奥壁幅2m、最大幅2.6m、玄門部幅2.5m、高さ4~4.5mある。胴張りの平面プランをもち、玄門部幅にくらべて奥壁幅が狭い。袖部の長さは右袖60cm、左袖80cmである。

玄室壁面は、和泉砂岩の大型石材を基本的に横積みし、隙間には和泉砂岩や結晶（緑色）片岩の小割石を詰めている。奥壁は、最下段に長さ2.3m以上・幅約1.5mの大型石材を置き、3段積みで構成される。側壁は、長さ1~2m・幅0.5~1m前後の大型石材と、長さ0.5~1m・幅30~50cm前後のやや小さな石材を4~6段横積みして構築される。最下段に大型石材が据えられるとは限らないが、ほぼ奥壁に対応するように目地を通す箇所が認められ、側壁はおおむね3~4回にわけて構築されたことがわかる。

玄室天井部は大型の石材が2個架構されており、羨道寄りの天井石がやや低くなる。天井部の規模は、長さ約2.8m・幅約1.2mで、床面積の約3分の1となる。玄室前道の天井石は、玄室と羨道の両方にまたがって架構される。

奥壁、両側壁とも基底石よりも天井石に近づくほど持ち送りは急で、持ち送りの角度は基底石で約80度、天井石付近で約60~70度である。（前田）

玄室前道 袖部には柱状の立石を使用し、羨道より幅の狭い玄室前道をつくる。幅約1.1m・高さ約1.9mある。袖石の上端部は、玄室前道天井石より約50cm低く、その間に長さ1.5m以上・幅約40cm・厚さ約15cmの結晶（緑色）片岩の板石を縦に石梁状に架構している（図5）。袖石は、立面形や平面プランで見ると、羨道側が直線的になるように据えられている。また、袖石と石梁状施設との位置関係からみても、袖石は羨道側



図3 墳丘（北から）

からの外観を強く意識した配置となっている。

玄室前道の床面には玄室前道基石はなく、そのかわりに長さ40cm・幅20cm・厚さ15cm程度の扁平な和泉砂岩の河原石を10枚程敷いて、玄室と羨道の仕切石としている。これらの仕切石の上面は、玄室の礫床上面から約20cm高い。（前田）

羨道 羨道部は開口部の天井石と側壁の上部が既に失われているものの、平面プランと側壁の状況からみて、現存している側壁端部が本来の開口部と推定される。長さ約4.5m・幅1.6~1.8m・高さ約1.9mあり、開口部にむかってゆるやかに開く平面プランをもつ。失われた天井石は1個と考えられ、羨道の天井石は玄室前道を含めて本来3個で構成されていたと考えられる。

羨道の側壁は、玄室と同じく和泉砂岩の横積みで構築されているが、玄室にくらべてあきらかに小ぶりの石材が使用されている。側壁の上半部は下半部よりさらに小型の石材が使用される傾向が認められる。（前田）

閉塞石と仕切石 羨道の前半には閉塞石が長さ240cmにわたって積まれていた（図4）。これはまず玄室寄りに石材を横一列に並べたあと、前列の石材に持たせかけるように順次最下段を敷き並べ、その上面を同じ手順で積み上げている。高さは約1mが遺存しており、7段分あった。

これらの石材は15cm角から50~60cmの大きさで、ほとんどが砂岩（礫岩）の河原石であるが、結晶片岩も混えており、計636個あった。玄室側は順次手前へ持ち送って傾斜をつけて比較的整然と積まれているが、外側は石材も比較的小さく、あまり規則的な積み方はされていない。また、閉塞石が終った外側約60cmの間には、墳丘盛土のなかに砂岩の河原石がいくつか埋め込まれていた。

閉塞石の玄室側最下段に添って、羨道を横に区切るような状態で結晶片岩の石材が床面になかば埋め込まれていた。この石材は長さ155cm・幅28cm・厚さ10cmあり、やや斜めに埋め込んである。閉塞石最下段の止め石を兼ねたものであろう。

閉塞石の外側の黄灰色土（盛土）中から須恵器杯破片1点（図8-5）、閉塞石最下段と羨道右壁に接し



図4 閉塞石（玄室側から）

て須恵器杯身（小杯付鉢か）1点（図8-4）が出土した。（大野）

玄室の床面 玄室床面の土層には5～10cm角の砂岩角礫が黄灰色砂質土を混えて敷かれていた。この礫層は厚さ10～20cmあり、瓦器片が含まれていた。また、炭片の集中した部分もあり、13～14世紀の再利用に伴うものと考えられる。

この角礫敷の下には多量の円礫からなる床面がみられた。この円礫は白礫（石英）を主とし、結晶片岩やチャートが混えている。直径は1～20cmで、約4万個にも及び、円礫敷の厚さは10～20cmあった。

玄室奥壁寄りと中軸から東半部の2個所で、直径5cm以下の小礫が集中する部分が認められたが、棺の設置場所と断定することはできなかった。また、床面の周辺部では、円礫だけでなく結晶（緑色）片岩の小割石が多く検出された。その一部は最下層にも及び、礫床にはもともと多少の結晶（緑色）片岩が混っていたものと思われる。（前田）

羨道の床面 羨道の仕切石から内側の床面には、結晶片岩の割り石がすきまなく敷かれていた。この割り石は5～6cmの細かなものから30cm程度の大きな石材まで混えており、厚さは10～15cmあった。上面はゆるやかな傾斜をもっており、閉塞石に接するところと玄門部では約20cmの高低差があった。この割り石敷きのなかに、羨道左側壁に接して轡1点（図10）が埋め込まれた状態で検出された。

割り石敷きを取り除くと、墳丘盛土と同質の黄灰色土があらわれた。この黄灰色土のなかにも砂岩と結晶片岩の石材が埋め込まれていたが、それらの石は全面に敷きつめた状態ではなかった。また、この黄灰色土の上面はあまりしみがなく、床面として使用されたものではないと考えられる。

黄灰色土のなかからは、須恵器片が散乱状態で検出された。器形は台付壺であるが、首部と脚部が羨道右側壁下でそれぞれまとまって検出されたほかは、小破片となって200×150cmの範囲に散らばっており、それらのレベルも約20cmの差があった。これらの破片は復元すると同一個体（図8-7）であることがわかり、

黄灰色土を敷設する際に須恵器を破碎してその破片を埋め込んだものと考えられる。

この須恵器片を収納しつつ、黄灰色土やそのなかの石材を取り除いてしまうと、黄灰色の破碎した岩盤をつき固めた面があらわれた。羨道側壁の石材はこの土層の上に積み上げられており、石室を構築するときの一時期の地表面と考えられる。また、玄室前道には平らな石材が3個ずつ3列に敷きならべられている状態で検出された。ただし、この石材は結晶片岩の敷石で大部分覆われていた。（大野）

排水溝 玄室礫床の下には、玄室中央部を縦に排水溝が設置されていた。羨道から開口部にかけて設けた小トレンチによって、この排水溝は石室のほぼ主軸に沿って石室外まで続いていることが確認された。

基本的な構造としては、地山を逆台形に掘り込み、内部に結晶（緑色）片岩の板石をV字形に組み、その間に円礫を入れ、結晶（緑色）片岩の蓋石をしたものである。ただし、溝の掘方が浅くなる玄室奥壁側では、側石や蓋石が省略される部分がある。また、開口部付近では円礫がなくなり、V字形をつくる側石の角度が浅く、完全なV字溝とならない。（前田）

石室の構築 玄室の礫床を除去したあとと設けた小トレンチの観察によると、玄室の構築にあたっては、整形した岩盤の上に基底石を据え、暗灰色砂質土の置き土をして整地し、その上面から排水溝を設置し、その後で円礫を敷いて礫床を形成していた。大型石材を使用している左右の玄門袖石や奥壁と側壁の一部の基底石は、岩盤面からさらに据え付けの穴を掘り込んで設置しているのが認められた。（前田）



図5 横穴式石室 玄門部（羨道から）

の破片を
のなかの
た岩盤を
はこの土
るときの
道には平
いる状態
の敷石で

縦に排水
て設けた
ば主軸に
た。
り込み、
み、その
したもの
壁側では、
開口部付
の角度が

けた小ト
ては、整
土の置き
し、その
石材を使
部の基底
込んで設

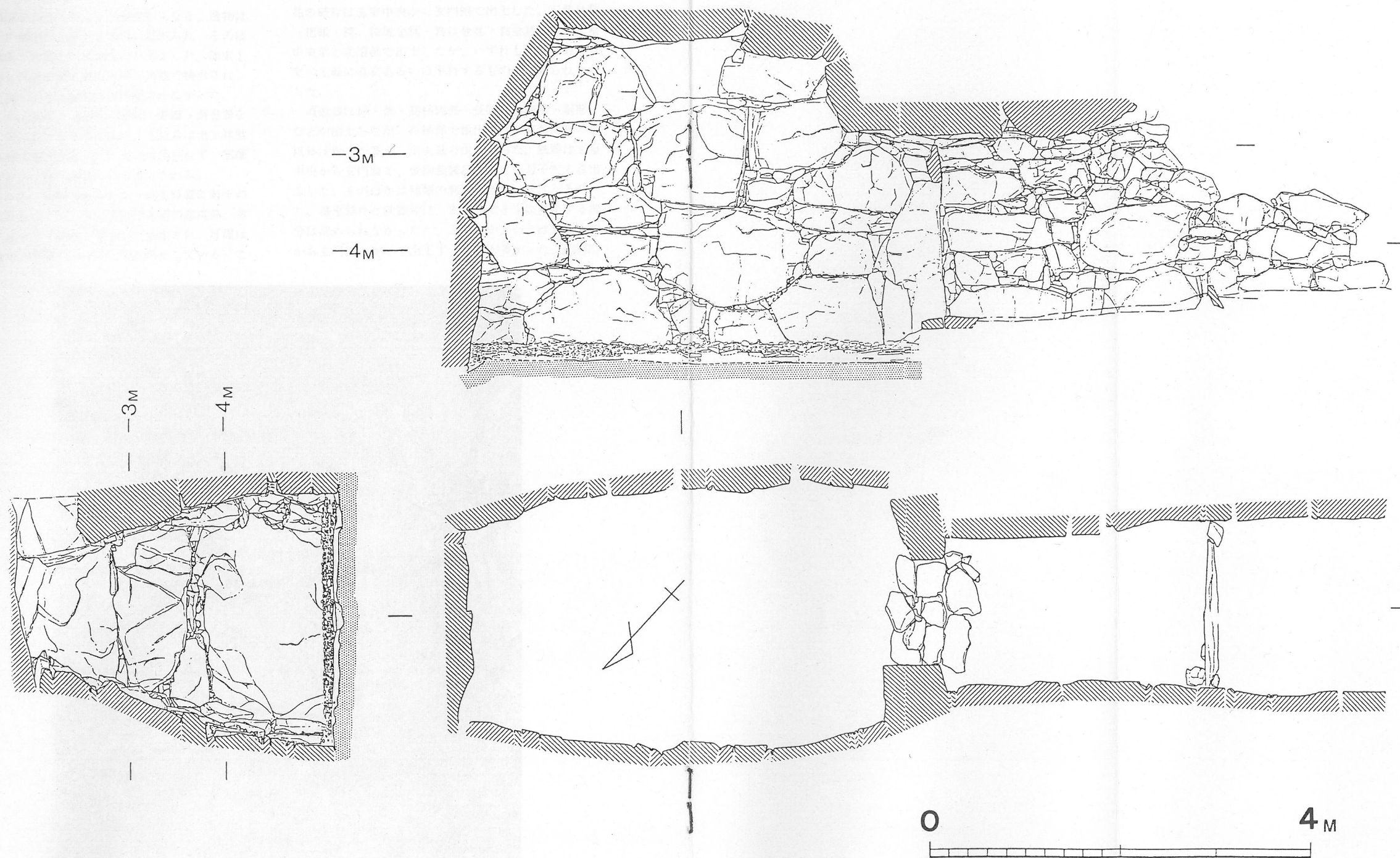


図6 横穴式石室 実測図

玄室床面の遺物出土状態

玄室床面は前に述べたように礫床からなる。遺物は主としてこの礫床の上面と上層部に認められ、そのほか若干が礫床下層部と排水溝内から出土した。礫床上層部の遺物も円礫の間に落ち込んだ状態で検出され、礫層中に上面とは別の埋葬面は確認されなかった。

遺物としては耳環・刀装具・馬具・鉄器・須恵器などがあり、骨の細片も検出された。それらは出土状態からみて本来の位置を保っているとは思われず、濫掘や再利用を受けた際に移動したと推定される。

しかしながら、遺物の種類により出土位置に若干の傾向が認められた。つまり、骨片は玄室の北端部、奥壁から1.5 mまでの範囲に集中して検出され、耳環は玄室の中央から奥壁にかけて7個が出土している。こ

れに対して、金銅装馬具（辻金具・杏葉）や金銅装製品の破片は玄室中央から玄門側で出土した。刀装具類（把頭・鐔・鞘尻金具・鞘口金具・責金具）は、玄室中央部と北端部で出土したが、いずれも散乱状態で石室の主軸に直交あるいは平行するものは認められなかった。

須恵器は杯・蓋・高杯脚部・長頸壺口縁部・胴部片などが出土したが、左袖部で検出された有蓋高杯の蓋以外は細片が多く、出土量も少なかった。鉄器は玄室中央から玄門側で、金銅装製品とともに刀子が1点出土した。そのほかは種類の判別できない鉄片が多かった。須恵器片と鉄器片は、玄室内でとくに集中する部分は認められなかったが、どちらかといえば玄室中央から玄門側にかけて出土することが多かった。（前田）



図7 横穴式石室 奥壁

遺物

出土遺物一覧表

玄室床面 耳環 7, 圭頭太刀柄頭 1, 鞘口金具 1, 鐔 1, 脛巾 1, 責金具 3, 鞘尻金具 1, 杏葉 2, 辻金具 3, 轡残欠 1, 刀子 1, 鉄器片・金銅装金具残欠 若干, 須恵器(蓋 1, 杯蓋 1, 長頸壺・高杯破片 若干), 遺歯 4.

羨道床面 轡 1. **羨道床面下層** 須恵器台付長頸壺 1, 杯蓋破片 若干, 滑石製小玉 7.

閉塞石 須恵器小杯 1. **排水溝** 須恵器杯蓋破片 若干. **墳丘盛土内** 須恵器蓋破片 1,

羨道流入土 須恵器脛・蓋破片 若干.

(古墳時代以外の遺物) **玄室内角礫敷および羨道内堆積層** 瓦器片 若干, **墳丘盛土内** 弥生式土器片 若干.

須恵器 (図8) 1は玄室内の左袖部付近で出土した有蓋高杯の蓋である。天井部と口縁部の境の屈曲部は凹線状に調整され、口縁端部は丸く仕上げられる。つまみは扁平で、中央部がわずかに突出する。口径12cmである。2は排水溝を検出するために羨道開口部付近に設けたサブトレンチ内から出土した。出土位置は羨道床面より下層で、排水溝の中層であった。器形は蓋で、1と類似の形態をもち、屈曲部に凹線が施される。口径12cmである。3は玄室内礫床上面出土の蓋である。天井部と口縁部の境は、稜線となっている。天井部から口縁部にかけてへうによる線刻がみられる。口径13cmである。4は手持器台(もしくは台付鉢)の台脚

上の杯のひとつが剥離したもので、羨道閉塞石の下から出土した。杯自体は口径10cmで、立ち上りの短い形態をもつ。杯と台脚との接合部には粘土が付けられ、その外面にはユビナデ痕が明瞭に観察される。この種の土器は、小型の杯を中心に1個とその周囲に等間隔に6個配することが多いが、これは接合部の形状からみて周囲に付けられた杯であることがわかる。5は羨道部閉塞石から外側で出土した蓋である。器壁が厚く、口縁端部からすこし上に突出部をもつ。突出部下端から口縁端部内面にかけて、カキメに似た調整がなされている。器形・調整ともに一般的な須恵器の蓋とは異なり、朝鮮半島からの移入品である可能性が高い。口

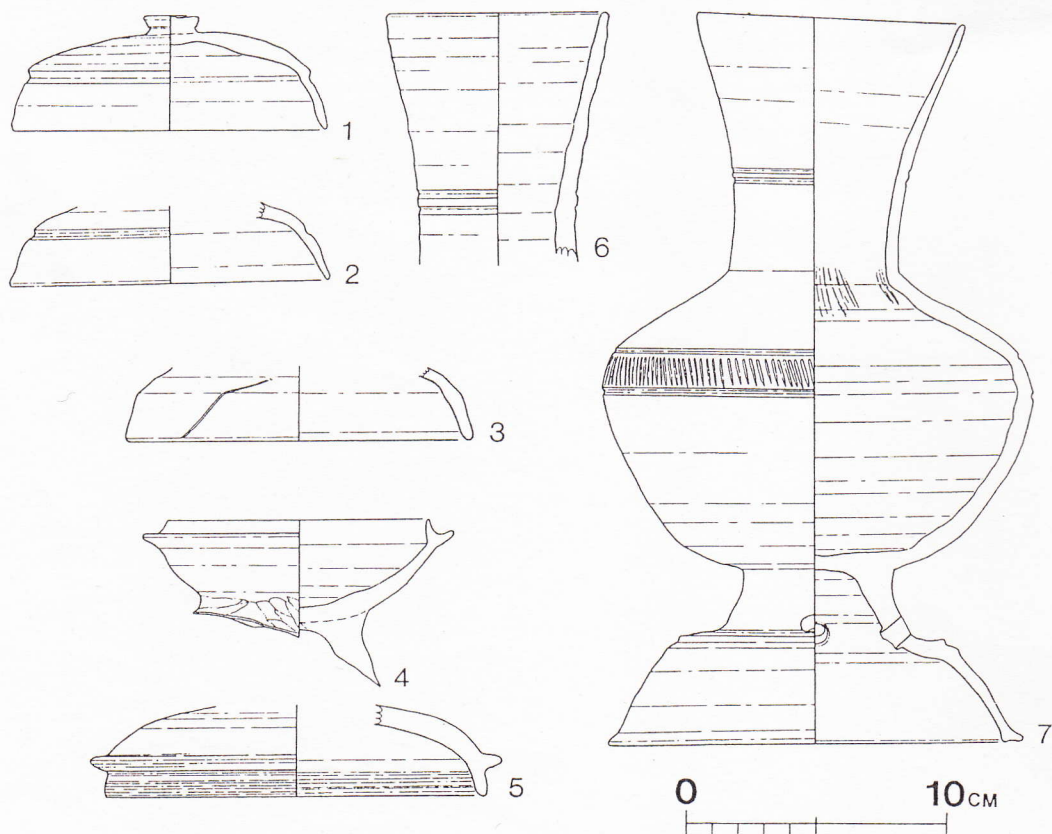


図8 須恵器

径14.4cm。6は長頸壺の口縁部で、玄室内礫床上層から出土した。頸部には2本の凹線がみられる。7にくらべて口径が小さくあまり外反しないが、頸部はやや長くなるとみられる。口径8.5cm。7は台付長頸壺で、羨道床面から出土した。肩の張る胴部と外反する口縁部をもつ。頸部に2本の凹線、胴上部には2本の凹線とその間に斜行する刻目文が施されている。台部は円形の透しが4方につけられている。口径10.3cm・高さ28.2cm。(前田)

刀装具と馬具など 刀装具は各部分の金具が出土しているが、大きさに大小がある。鞘口金具はやや押しつぶされているが、長さ5cm・幅約4cmあり、柄頭とともに太刀金具であろう。柄頭(図13)には透し彫りがよく残っているが、図柄はかなり文様化している。鐔・腰巾・責金具はやや小さく、小刀金具と考えられる。鐔(図14)は4.6cm×3.5cmの卵形で、金銅装がよく残っている。腰巾(図11)は長さ2.4cm・長径3cmで、刀身孔の幅2.15cm・峰の厚さ5.5mmある。このほか、断面が卵形をした筒状の金具(図11右)があり、いちおう小刀の鞘尻金具としておく。長さ9.9cm・長径3~2.7cmある。この金具の中には2本のピンのような金具(図15)が遺存している。長さ4cm・幅2mmの小さなもので、断面は区形をしている。一端は丸く、もう一方の端はへら状に平たい。なお、玄室内から出土した鉄器片には小刀の茎かと思われる破片がある。

図10は羨道の床面から出土した轡の鏡板である。長径9.5cm。金銅装の一部が残っている。片方の引手と銜が共に遺存していた。玄室の床面から出土した杏葉は、長径約10.5cmあり、そのうち1個には金銅装がよく残っているが、もう一方は失なわれている。このほか轡の円環部の残欠がある。ただし、これらの遺物がどの埋葬に伴うものかはわからない。

耳環は7個のうち6個がそれぞれ対になるようである。1対は長径3.1cm・短径2.85cmとやや扁平で(図9)、もう1対は長径3.25cm・短径3.15cmとやや大ぶりである。この2対は金張りがよく残っている。

このほか、玄室床面礫敷の中に、遺骸の歯が4個遺存していた。橿原考古学研究所研究嘱託(日本考古学协会会员)宮川 渉氏に整理を依頼したところ、3個は少年期10歳代、1個は青年期の人間の歯牙で、いずれも女性の可能性が考えられる、という観察結果を頂いた。(大野)



図15 棒状の金具

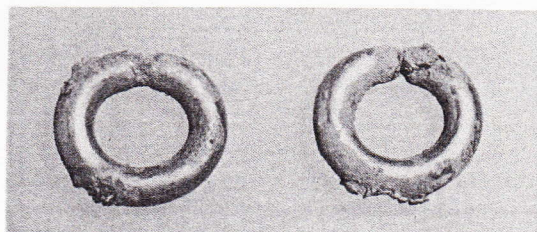


図9 耳環

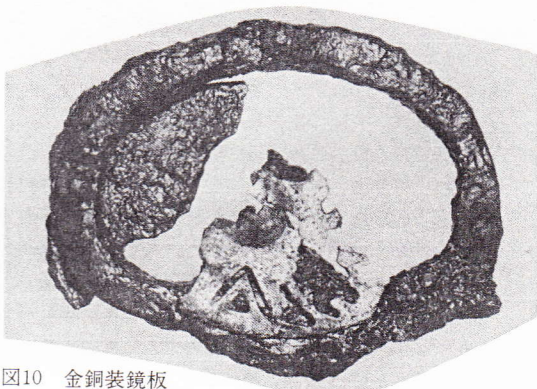


図10 金銅装鏡板

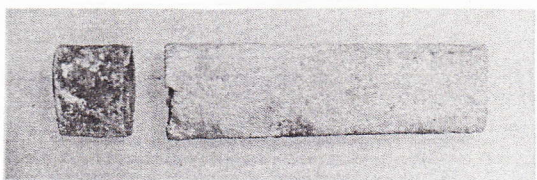


図11 腰巾(左)と鞘尻金具(右)

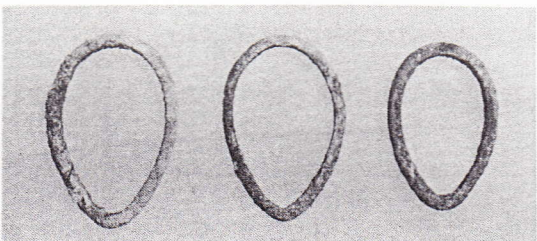
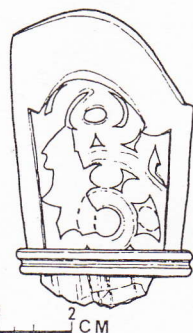
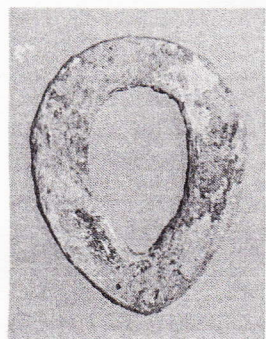


図12 責金具



(左) 図13 圭刀太刀 柄頭実測図
(右) 図14 鐔

0 2 CM



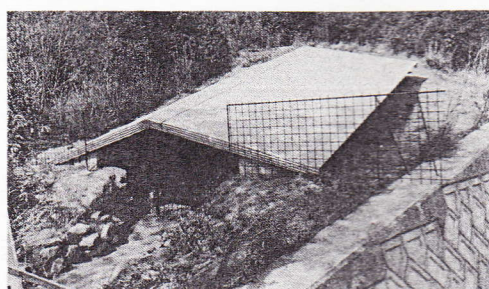
小結

園部円山古墳は丘陵の先端を利用して築かれており、直径25m程度の円墳と思われる。ほぼ南南西に開口した横穴式石室をもっており、この石室は全長9.55mある。これは、たとえば岩橋千塚古墳群のなかの盟主級の古墳の石室に匹敵する。単純に数値のみを比較すれば、全長において大谷山22号墳や將軍塚古墳(後円部)の石室より長く、天王塚古墳より若干短い。石室の構築には紀ノ川下流域では類例の少ない砂岩の大型石材を用いている。にもかかわらず、側壁の持ち送りが強い点や、側壁の石積み目のすまに構造上あまり意味がないと思われる小割石を詰め込んでいる点、さらに玄門部にやや幅の狭い空間をわずかではあるがつくりだしている点など、いわゆる「岩橋型横穴式石室」を意識したところがうかがわれる。ただ、玄室前道基石の存在が「岩橋型横穴式石室」を規定する基本的な要素であるとするならば、これを欠くこの石室は「岩橋型横穴式石室」の直接的な系譜には入らないものかもしれない。玄門部に架構された梁状の施設も特異なものであるが、比較的軟弱な石材を用いており構造上意味のあるものとは思われない。

出土遺物は後代の石室再利用などのためか、残欠状態となったものが多く量もあまり多くない。ただ、金銅装の刀や馬具など本来豊富な副葬品をもっていたことがうかがわれる。玄室内から出土した須恵器の型式

差や耳環の数からみて、築造のあと3回の追葬があったと考えられる。玄室内での遺物出土状態の傾向からみると、これらの遺骸は玄室中央部から奥壁にかけて安置されたものであろう。副葬品のうち馬具は袖部付近に置かれていた可能性が強く、須恵器の置かれた場所は特定し難い。

出土した須恵器のなかでは、玄室内から出土した蓋(図8-1)や排水溝内出土の蓋(羨道床面下層出土の杯蓋破片と接合し、いずれも羨道部を整地する段階で埋め込まれたものであることがわかる。図8-2)、羨道部床面下層出土の長頸壺(図8-7)などが古い形態を示している。これらを大阪府南部窯址群での編年観によってみると、6世紀第3四半期のはじめに相当しよう。最も新しいものは羨道閉塞石下出土の小杯(図8-4)で、当然最後の埋葬に伴うものであるが、6世紀末葉のものと考えておきたい。(大野・前田)



石室の覆屋

調査参加者

第1次調査

大野 左千夫 近江 丈夫 橋本 浩希 吉本 博 小西 庸仁 塩崎 亨 野原 浩一
米田 忠弘 武内 桂彦 森本 規生 榎本 滋 西田 昌宏 富永 浩史 松井 祥一
坊 信次 山田 達男 田中 浩 村田 昌明 山本 浩久

第2次調査

大野 左千夫 前田 敬彦 益田 雅司 北野 隆亮 近江 丈夫 玉井 伸明 出縄 泰子

あとがき 園部円山古墳の発掘調査は緊急な事態のなかで始まったにもかかわらず、保存への見通しのなかで時間的にも多少の余裕をもって進めることができた。これはひとえに地蔵寺副住職である大森敏弘氏の御配慮によるものであった。その後、古墳の保存についても大森氏の決断によるところが多く、ここにあらためて敬意を表する次第である。

また、第1次調査において、基礎的な調査であるにもかかわらず主体的に調査に参加し、調査の遂行を支えてくれた当時の和歌山大学考古学研究会の会員諸君にも心からお礼申し上げたい。今後、この古墳が地域の歴史学習の場として活用されとともに、和歌山における古墳研究資料の一端を担うことができることを願ってやまない。(大野)

園部円山古墳調査概報

1989年6月1日発行

編著者 和歌山市教育委員会
文化振興課文化財班
発行者 園部円山古墳保存会
和歌山市園部81 地蔵寺内
印刷所 株式会社 昇和印刷

© S.OHNO T.MAEDA 1989

